【コラム】

海と川の結節点――由良

吉野　健一

京都府北部を南北に流れる由良川は、古代から丹後の流通の大動脈として存在していたと考えられ、周辺には多くの遺跡や山城などが存在する。中でも川の河口に位置する由良は、百人一首にも採録されている曾根好忠「由良の門を」の歌や、森鷗外の小説でも有名な「山椒大夫」の舞台ともされ、古代から多くの人々が行き交う交通の要衝であったことを物語る。戦国時代の終わり、京都から丹後へやってきた公家の吉田兼見は、その日記に由良川を使って移動したことを記し、戦国時代の回国の修験者もまた由良に立ち寄っている。由良周辺には、中世に遡ると思われる石造物も多く確認できるが、一方で文字資料が少なく、中世から近世にかけての由良の様子は、必ずしも明らかになっていない。

現在は、海沿いに民家が連なり、後方に田や畑があり、さらにその後ろには由良ヶ岳がそびえる景色が広がっている。しかし、現地を歩きながら高低差を見ると、京都丹後鉄道の線路が通る付近より民家側が一段高く、逆に現在田畑になっている地域は全体的に標高が低い。大正時代と見られる由良の古写真では、由良川に面した港地区に廻船が停泊しているが、中世あるいはそれ以前には、海岸線が異なり、港が現在とは違った形態をとっていた可能性も考えられる。曾根好忠や吉田兼見は、いったいどのような由良の景観を見ていたのだろうか。

また、由良や川の対岸に位置する神崎では、江戸時代の終わりから明治時代にかけて、多くの人々が「北前船」や廻船の乗組員として活躍した。江戸時代には、若狭湾と福知山や綾部方面をつなぐ由良川水運で、特別な位置を占めていた由良の船乗りが、どのような経緯で外海に出る船の乗組員として活動するようになったのか。丹後半島の他地域でも、船頭を輩出する場所はあるが、村全体が「船乗りの村」といってもよい程、多くの人が従事する地区は他には存在しない。いわゆる「北前船」が登場する以前から、既に丹後の船が東北地方の日本海沿岸などと交易をしていたことが分かっており、その中には由良の船も含まれていることから、このころに川船のみならず遠洋まで航行する船に乗り込むようになり、航海技術を向上させたと考えられる。その中で、「北前船主」として活躍した宮津や岩滝の船主から、その技術を見込まれて船頭などとして活躍していったものと思われる。航海安全を祈って讃岐の金毘羅神社から持ち帰った祈祷札や、船絵馬が村内の神社に多く奉納されていることからも、村全体として遠方へ漕ぎ出す人々の安全を祈っていたことが分かる。

他にも塩作りや養蚕、素麺製造、酒造などの産業も展開していたと伝えられ、一部関係の資料も残るが、これらも由良の地域性がなせるものと言えよう。

近年、由良地域での歴史資料の発掘が進み、寺社の資料や石造物、また古文書等の調査が進んでいる。特に古文書では、「北前船」の船頭として活躍した加藤家文書をはじめとして、新たな資料も多く確認されており、現在調査が進められている。水運については、明治時代から大正時代にかけて各地で開通した鉄道によって打撃を受けたが、

少なくとも明治時代の後半までは、川船の定期航路をはじめ、それ以前からの交通の要衝としての役割を果たしていたことは明らかである。現在、地域の方々と連携して、資料の発掘や調査を進めており、今後さらに海と川の結節点としての由良の豊かな歴史像が明らかになるものと思われる。

（京都府立丹後郷土資料館主任）

写真２　大正時代頃の由良港の様子（絵葉書）

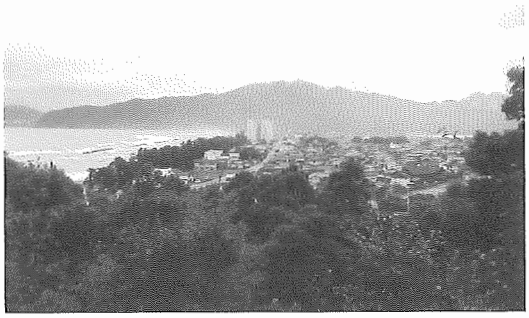

写真１　由良・金毘羅神社からみる由良地区
右側に一部田んぼが見える

京都府立大学文化遺産叢書　第12集

「丹後の海」の歴史と文化

編　集　藤本仁文
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日　2017年3月31日
印　刷　サンケイデザイン株式会社
〒603-8165　京都市北区紫野西御所田町14番地2